The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アクセント辞典から見る4つの漢字で表記される語のアクセント : NHK系2冊と明解系2冊の「ア」～「カ」で始まる語を例に
Author(s)	陳, 曦
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 37-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62027
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アクセント辞典から見る
4つの漢字で表記される語のアクセント

― NHK系2冊と明解系2冊の「ア」～「カ」で始まる語を例に ―

陳　曦

要旨　本稿は4字漢語の一部にアクセントのゆれがある理由を探ることを目的として，NHK系と明解系の計4冊のアクセント辞典の「ア」～「カ」で始まる語を調べた。その結果，そのどちらにおいても4つの漢字で表記される語の中で，アクセントの融合・非融合の記載に変化のある語はあまり多くないことが分かった。また，数少ない記載変化の中には，融合へ向かう記載変化に加え，非融合へ向かう記載変化も観察された。さらに，NHK2016年版と新明解においては，4つの漢字で表記される語で非融合アクセントの発音を含む語の割合が低いことが分かった。

1　はじめに

日本語の複合語には，［チュ「ーゴクミ┐ヤゲ］[1]（中国土産）［ジ「コボ┐ーエー］（自己防衛）のようにアクセントが1つに融合するものと，［「チュ┐ーゴク「ナ┐ンブ］（中国南部）［「オ┐ーザボ「ーエー］（王座防衛）のように融合しないものがある。筆者が行ったこれまでの発音調査では，後部要素が状態や動作をあらわす4字漢語のアクセントの融合・非融合を左右する要因として，（ア）要素間の統語的関係，（イ）要素の意味，（ウ）要素のモーラ数・形態素構成があることが明らかになった。そして，これまでの発音調査では，語によって大きく①融合傾向の強い語，②非融合傾向の強い語，③話者間のゆれと話者内のゆれが激しい語，といった3種類の4字漢語が観察された。

このように，これまでに調べた4字漢語の一部にアクセントのゆれ（融合・非融合両方の発音が可能）が観察されたが，なぜ1つの語に2種類の発音があるのだろうか。ひとつの可能性として，元々非融合アクセントで発音されていた複合語が融合アクセントへ変化（統一）していく途上にあるため，2種類のアクセントが混在しているのではないかということが考えうる。この仮説を検証するひとつの方法として，複数のアクセント辞典を比較することで，複合語のアクセントに変化があるかどうかを明らかにしたい。もしあればその変化過程を捉えたい。

---

1) 角括弧内の表音カナに付けられている記号「「」が上昇，「┐」が下降を表わす。この語の場合，特殊モーラでの上昇が前にずれた[「チューゴクミ┐ヤゲ]のような発音もよくあるが，本稿では便宜的にそれも含めて[チュ「ーゴクミ┐ヤゲ]の形で示すことにする。

もしそのような傾向が本当にあるならば，「所属語彙の少ない方の語は、所属語彙の多い安定型に代わりつつある」（NHK 1985，NHK 1998）という考え方で解釈できるのではないかと思われる。つまり，所属語彙の少ない非融合アクセントで発音される語が，所属語彙の多い融合アクセントに代わりつつあるということになる。

今回は試しに「ア」～「カ」で始まる語（各辞書の 1/5 ぐらいの頁数）を調べ，その結果を報告する。

2　方法

2.1　使用辞典

今回は以下の 4 冊のアクセント辞典を使用した。

NHK 系[2)]

① 日本語アクセント辭典　　1943 年（昭和 18 年）
（以下「**NHK1943 年版**」）

② NHK 日本語発音アクセント新辞典　　2016 年（平成 28 年）
（以下「**NHK2016 年版**」）

明解系

① 明解日本語アクセント辞典　第二版　　1981 年（初版 1958 年）
（以下「**明解**」）

② 新明解日本語アクセント辞典　CD 付き　　2010 年（新明解日本語アクセント辞典 2001 年[3)]）
（以下「**新明解**」）

2.2　対象語

NHK 系の 2 冊と明解系の 2 冊の「ア」～「カ」で始まる語から，4 つの漢字で表記されている語とそのアクセント型を抽出した。前部要素と後部要素の語種の組み合わせは以下のタイプがある。

1)　前部も後部も漢語[4)]　　一国一城　イッコクイチジョー
2)　前部も後部も和語　　青息吐息　アオイキトイキ
3)　前部が漢語，後部が和語　　外国為替　ガイコクカワセ
4)　前部が和語，後部が漢語　　秋雨前線　アキサメゼンセン

---

2) NHK 系のアクセント辞典は，今回調べた 2 冊以外にも，1951 年版，1966 年版，1985 年版，1998 年版があるが，今回は最も古い 1943 年版と最新の 2016 年版を使うことにする。

3)『新明解日本語アクセント辞典』の刊行が 2001 年で，CD が付いた『新明解日本語アクセント辞典　CD 付き』の刊行が 2010 年。

4) これまで調査した後部要素が状態や動作をあらわす 4 字漢語はここに入る。

2.2.1　NHK 系の 2 冊

NHK1943 年版と NHK2016 年版から抽出した対象語数と頁数などを表 1 に示す。

また，大きな傾向を探るために，まず手始めに語種や形態構造を制限せず，形態構造が 2+2 の語だけではなく，3+1（奥入瀬川）と 1+3（女歌舞伎）の語も併せて抽出した。

NHK2016 年版における【】で提示される「NHK の放送で使う主な表記」の語だけでなく，《×》で示される「原則として NHK の放送で使わない漢字・表記」の語（例：《×臥薪嘗胆》）も対象にする。

同じ語と思われるものがこの 2 冊で違う表記で提示されていることがあるが，そのうちの 1 つ以上が上の条件を満たしていれば対象になる。（例：稲荷寿司，稲荷鮨（2016 年版）稲荷鮨（1943 年版））

なお，NHK1943 年版と NHK2016 年版の共通の語が 291 語あり，2 冊のうち 1 つ以上に記載のある語が 948 語ある。

さらに，非融合アクセント（前部要素と後部要素が 1 単位の中高型アクセントに融合しない）と融合アクセントについて，NHK2016 年版と NHK1943 年版は表記上に違いがある。

また，NHK2016 年版において，「閻魔大王」［エ˥ンマ・ダイオ˥ー］や「一般大衆」［イッパン・タイシュー］のような「複数の単位からなる語」の場合，「中点「・」で単位の切れ目を記した」ということである。「これは，ここで必ず区切って発音するという意味ではない。普通は一気に 1 語として発音するが，場合によっては区切って発音することもあるということを表わすものである。」と述べられている。このように，NHK2016 年版における「・」の付いているものは「非融合」として認定した。

一方，NHK1943 年版にも「・」の記号があるが，それは NHK2016 年版とは違う意味で用いられていると思われる。例えば，「営業停止」［エーギョー・テ˥ーシ］のような，1 単位の中高型アクセントに融合する場合でも，「・」が記されている。NHK1943 年版には「・」についての説明が見当たらないが，「太字の仮名の間に，時々施した中点・は，その語が

表 1　NHK 系の 2 冊から抽出した語数

	1943 年版	2016 年版
ア～カの頁数	1～164	1～308
全頁数	830	1484
抽出語数	506	643
全収録語数	44000	75000
抽出語数/全収録語数	1.2%	0.9%
抽出語数/ア～カの収録語数（推定）[5]	5.8%	4.1%

5) 抽出語数/ア～カの収録語数（推定）=抽出語数÷［全収録語数×（ア～カの頁数÷全頁数）］

二語の意識で用いられていることを表わす。」(NHK1951 年版の凡例 p.5)という使い方に近いのではないかと思われる。このように，NHK1943 年版においては「非融合」であるかどうかの判断がやや難しいため，作業のプロセスとしては，まず NHK2016 年版におけるアクセントと比較し，もし 2016 年版に同じアクセントがある場合，2016 年版のそのアクセントと同じ融合（非融合）のパターンとして認定するが，もし 2016 年版に同じアクセントがない場合，その都度前部要素と後部要素の単独のアクセント記載を調査するなどにより判断する。例えば，「営業停止」について，NHK2016 年版には[エイギョー・テーシ]（非融合）と記載されているのに対し，NHK1943 年版にはそれとは違う[エーギョー・テ┐ーシ]というアクセントが記載されているが，NHK1943 年版を使って調べたところ，前部の「営業」は[エイギョー]と，後部の「停止」は[テーシ]と記載されていることから，[エーギョー・テ┐ーシ]は「融合」として認定した。

また，複数のアクセントがある場合の排列の順序については，NHK1943 年版において，平板型，頭高型，中高型，尾高型の順序によって配列されているが，「これは全く機械的な排列であって、そこには指導的意味を含ませていない。」ということである。この点においては，第 1 アクセントや望ましいと思われるものを先に掲載するという NHK2016 年版や明解，新明解とは異なる。

2.2.2　明解系の 2 冊

明解と新明解から抽出した対象語数と頁数などを表 2 に示す。

2.3　記号について

以下は次の記号を使う。4 冊の辞書とは若干違う。また，4 冊の辞書において下がり目の記号が異なる。

┐　下がり目　　キ　母音無声化[6)]　　ガ　ガ行鼻音

表 2　明解系から抽出した語数

	明解	新明解
ア～カの頁数	1～157	1～185
全頁数	806	931
抽出語数	721	809
全収録語数	64000	75000
抽出語数/全収録語数	1.1%	1.1%
抽出語数/ア～カの収録語数（推定）	5.8%	5.4%

6) 『日本語アクセント辞典』(1943)には母音無声化についての情報が記載されていない。

3　NHK 系の結果

3.1　NHK 系における記載変化

今回調べた範囲では,非融合に向かう記載変化は表 3 に示すように,計 3 例観察された。一方，表 4 に示すように，融合に向かう記載変化は 8 例見られた。

表 3　NHK 系における記載変化—非融合に向かう記載変化

語	NHK 1943 年版	NHK 2016 年版
営業停止	**エーギョー・テ゛ーシ**	**エイギョー・テーシ**
勧善懲悪	カンゼン・チョ゛ーアク	**カンゼン・チョーアク** カンゼンチョ゛ーアク
完全無欠	カンゼン・ムケツ **カンゼン・ム゛ケツ**	カンゼン・ムケツ

表 4　NHK 系における記載変化—融合に向かう記載変化

語	NHK1943 年版	NHK2016 年版
青息吐息	アオイ゛キ・トイ゛キ	**アオイキト゛イキ** アオイ゛キ・トイキ
一国一城	イッコク・イチジョー	**イッコクイチ゛ジョー** イッコク・イチジョー
一瀉千里	イ゛ッシャ・セ゛ンリ	イ゛ッシャ・セ゛ンリ **イッシャセ゛ンリ**
一寸法師	イッス゛ンボーシ (イッス゛ンボシ)	**イッスンボ゛ーシ** イッス゛ンボーシ
一石二鳥	イッセキ・ニチョー	イッセキ・ニチョー **イッセキニ゛チョー**
有象無象	ウゾ゛ー・ムゾ゛ー	ウゾ゛ー・ムゾ゛ー ウゾー・ムゾー **ウゾームゾ゛ー**
閻魔大王	エ゛ンマ・ダイオ゛ー	**エンマダイオ゛ー** エ゛ンマ・ダイオ゛ー
親分子分	**オヤ゛ブン・コ゛ブン**	**オヤブンコ゛ブン**

表 3 と表 4 を合わせて見ると，NHK2016 年版における融合・非融合両様のものは，NHK1943 年版では 1 種類のアクセントしかないものが多いようである（7 変化中 7）。つまり，融合・非融合両様のものは，元々は融合か非融合，そのどちらかのみであった可能性が高いのではないかと思われる。すると，現れている融合・非融合両様の形は元々あった片方の発音にもう片方が加わったという変化の結果である可能性が高いということになる。また，こうした記載の変化の方向性については，「融合に向かう記載変化」も「非融合に向かう記載変化」もあるが，「融合に向かう記載変化」のほうがより多く起こっているのではないかと考えられる。しかし，ここで注意すべきは今回観察された 7 例の変化はあくまで「記載の変化」であり，辞書は規範を示すのが目的であるため，観察された辞書における変化は発音の実態を反映しているとは限らないということである。

3.2　NHK2016 年版における融合・非融合両様の語と非融合だけの語

表 5 に示すように，NHK2016 年版から抽出した 643 語のうち，融合・非融合両様の語が 44 語，非融合だけの語が 115 語ある[7)]。非融合だけのものの方が融合・非融合両様のものより多いことが分かる。

そして，両者を合わせると 159 語あり，つまり非融合の発音を含む語が 159 語あり，全体の 25%を占めることになる。ここから非融合アクセントの所属語数が少ないことが読み取れる。

さらに，643 語の中，「青息吐息」のように音読みではないものと，「核廃棄物」のように形態構造が 2+2 ではないもの，そして[仏教]や[医学]などの注釈されている固有名詞と専門用語を除けば，424 語がある。424 語のうち，40 語(9%)が融合・非融合両様，109 語(26%)が非融合だけである。両者を合わせると，35%の語が非融合アクセントを持つことになる。非融合アクセントを持つ複合語（ここでは，2+2 形態構造を持つ 4 字漢語）はやはり所属語彙が少ないと言えそうである。

表 5　NHK2016 年版における融合・非融合両様の語と非融合だけの語

	語数	語例	
融合・非融合両様	44 （2+2 形態構造の漢語 40 語）	暗中模索	アンチュー・モサク アンチューモ┐サク
非融合だけ	115 （2+2 形態構造の漢語 109 語）	安心立命	アンシン・リツメー

7) ただし，643 語のうち融合か非融合か両様か判断が難しいものもある。例えば，「安全確保」の項目に[アンゼンカ┐クホ]と記載されているが，前部要素の「安全」と後部要素の「確保」の元々のアクセント型が[アンゼン]（平板型）と[カ┐クホ]（頭高型）であるため，複合しているかどうかが表面形から分からない。そのようなものは「融合・非融合両様」と「非融合だけ」の語としてカウントしていない。

4　明解系の結果

4.1　新明解における融合・非融合両様の語と非融合だけの語

新明解には，語の後にアクセント習得法則の番号が付いている。アクセントの融合・非融合問題と最も密接な関係にあるのは次の習得法則 97，98，99 だと思われる。その解説を下に掲げる。

97 分離文節　二つ以上の文節を続けて用いられる場合，一つ一つの意味をはっきり表わすように発音すれば，各の文節が分離してそのアクセントどおりに発音される。

98 接合文節　日常の会話では，一つ一つの文節をきり離して発音するよりも，軽く続けて一語のように発音する場合が多い。このように文節が接合される場合には，前部の文節はアクセントどおり発音されるが，後部の文節は特に強調しようとしない限り，次のように型の変化をおこす場合が多い。（表 6 参照）

99 結合文節　まれに慣用句などで，二つ以上の文節が続いて固定した意味を表わすようなものには，いつもひと続きに発音する傾向がある。この場合は，後部の文節が平板式ならば後部の第一拍まで高く，後部の文節が起伏式ならば，後部の文節のアクセントの高さの切れめまで高くなる。特に前部が平板式のものは結合文節となりやすく，全体が中高型になるものが多い。

習得法則の 97「分離」と 98「接合」が筆者の言う「非融合アクセント」にほぼ相当し，99「結合」が筆者の言う「融合アクセント」にほぼ相当すると思われる。

表 6 文節のアクセントの法則一覧（秋永一枝(2010)「アクセント習得法則」(106)）

	分離文節 (97)	接合文節 (98)	結合文節 (99)
自縄自縛	ジジョー・ジバク 〔ジジョー(・)ジバク〕	ジジョージバク	ジジョージバク
自由自在	ジユー・ジザイ 〔ジユー(・)ジザイ〕	ジユージザイ	ジユージザイ
青息吐息	アオイキ・トイキ 〔アオイキ(・)トイキ〕	アオイキトイキ	アオイキトイキ
白河夜船	シラカワ・ヨフネ 〔シラカワ(・)ヨフネ〕	シラカワヨフネ	シラカワヨフネ
否が応でも	イヤガ・オーデモ	(イヤガオーデモ)	イヤガオーデモ
言わぬが花	イワヌガ・ハナ 〔イワヌガ(・)ハナ〕	イワヌガハナ	イワヌガハナ
是が非でも	ゼガ・ヒデモ 〔ゼガ(・)ヒデモ〕	ゼガヒデモ	ゼガヒデモ
飲まず食わず	ノマズ・クワズ 〔ノマズ(・)クワズ〕	ノマズクワズ	ノマズクワズ
年がら年中	ネンガラ・ネンジュー 〔ネンガラ(・)ネンジュー〕	ネンガラネンジュー	ネンガラネンジュー
件の如し	(クダンノ・ゴトシ)	クダンノゴトシ	クダンノゴトシ

表 7　習得法則 97, 98, 99 の組み合せ

	法則	語数	語例	
①非融合だけ 97,98 のうちの 1 つ以上	a. 法則 97 のみ	1	雄蝶雌蝶	オ┐チョー・メ┐チョー
	b. 法則 98 のみ	15	営業停止	エーギョーテーシ
	c. 法則 97, 98	35	意気投合	イ┐キ（・）トーゴー[8]
	d. 法則 98, 97	3	一網打尽	イチモーダジン イチ┐モー(・)ダジン
	計	53		
②融合・非融合両様 97,98 のうちの 1 つ以上と 99	a. 法則 99 が前	5	花鳥風月	カチョーフ┐ーゲツ カ┐チョー・フ┐ーゲツ
	b. 法則 99 が後	10	永世中立	エーセーチューリツ エーセーチュ┐ーリツ
	計	15		
合計		68		

表 8　新明解の習得法則 27「複合の人名」について

	語数	語例	
融合・非融合両様	7	井原西鶴	イ┐ハラ・サ┐イカク イハラサ┐イカク
非融合だけ	27	有島武郎	アリシマ(・)タケオ

表 9　新明解の習得法則 39「畳語的な数詞その他」について

		語数	語例	
融合・非融合両様	非融合，融合	6	一汁一菜	イチジュー(・)イッサイ イチジューイ┐ッサイ
	非融合，新は融合	2	一攫千金	イッカク(・)センキン 新はイッカクセ┐ンキン
	計	8		
非融合だけ		14	一長一短	イッチョー(・)イッタン
融合だけ		12	開口一番	カイコーイチ┐バン

8) 「意気投合」[イ┐キ(・)トーゴー]のように，「・」に括弧が付いているものは，切れ目のある法則 97「分離」の発音と切れ目のない法則 98「接合」の発音の両方があることをあらわす。つまり，[「イ┐キ・ト「ーゴー]（法則 97）と[「イ┐キトーゴー]（法則 98）の 2 種類の発音ができるということになる。

表 7 に示すように，新明解から抽出した 809 語のうち，法則 97，98，99 に関連する融合・非融合両様の語が 15 語，非融合だけの語が 53 語ある。NHK2016 年版を調べたときの結果と類似しており，非融合だけのものの方が融合･非融合両様のものより多いことが分かる。また，両者を合わせると 68 語あり，つまり非融合の発音を含む語が 68 語ある。その他にも，法則 27「複合の人名」と法則 39「畳語的な数詞その他」が融合・非融合の問題に関係すると考えられる。

表 8 と表 9 に示すように，法則 27 と記載されている 34 の人名の中に，融合・非融合両様のものが 7 項目，非融合だけのものが 27 項目ある。

法則 39 と記載されている 38 の項目の中に，非融合だけのものが 14，融合だけのものが 12，融合・非融合両様のものが 6，非融合と新は融合のものが 2，不明のものが 2 個ある。

表 7～9 の語数を合わせて，それから不明の 2 語を除くと，807 語のうち，非融合だけの語が 53+27+14=94 語(12%)，融合・非融合両様の語が 15+7+6+2=30 語(4%)ある。両者を合わせて 124 語あり，つまり，非融合の発音を含む語が 124 語あり，全体の 15 %を占めることになる。ここから非融合アクセントの所属語数が少ないということが読み取れる。

4.2　明解系における記載変化

新明解と明解の共通の語が 694 語ある。2 冊における融合・非融合アクセントのパターンに違いがある項目を次の表 10 に示す。

表 10 から分かるように，明解と新明解における融合・非融合アクセントのパターンに違いのある項目が非常に少ない。非融合への記載変化が 3 例，融合への記載変化が 1 例，計 4 例の記載変化が見られた。記載変化の少なさに関して，規範を示すという辞書の性格から考えると，1958 年～2001 年の 40 年間ぐらいではアクセントの記載に変化がなくても全く不思議はないと思われる。

5　まとめ

今回は 4 字漢語の一部にアクセントのゆれがある理由を探るために，4 冊のアクセント辞典の「ア」～「カ」で始まる語を調べた結果，以下のことが分かった。

NHK 系と明解系のどちらにおいても 4 つの漢字で表記される語の中で，アクセントの融合・非融合という記載に変化のある語があまり多くないことが分かった。

この点に関して，辞書は規範を示すのが目的であるため，NHK 系の 1945 年～2016 年の 70 年間ぐらいで，また明解系の 1958 年～2001 年の 40 年間ぐらいではアクセントの記載に変化がなくても全く不思議はないと思われる。また，辞書は規範を示すことが目的であるため，辞書におけるアクセントの記載が発音の実態を反映しているとは限らない。例えば，一番多く発音されるアクセントが 1 番アクセントとして採用されるとは限らないため，実際のアクセントの融合・非融合の変化はこうした辞書における記載の変化より多い可能性があると考えられる。

表 10　明解系における記載変化

	明解　(1981)（初版 1958）		新明解　(2010)（初版 2001）	
	アクセント	法則	アクセント	法則
非融合アクセントへ				
営業停止 （非融合へ）	エーギョーテーシ **エーギョーテ˥ーシ**	98,99	エーギョーテーシ	98
開店休業 （非融合へ）	カイテンキューギョー **カイテンキュ˥ーギョー**	98,99	カイテンキューギョー	98
上方贅六 （非融合へ）	カミガタゼ˥ーロク	15d	カミガタゼ˥ーロク **カミガタゼーロク˥**	15d
融合アクセントへ				
一寸法師[9)] （融合へ）	イッス˥ンボーシ イッスンボ˥ーシ	15	イッス˥ンボーシ 古はイッス˥ンボシ 新は**イッスンボ˥ーシ**	15
その他				
青息吐息 （法則 97 が加わる）	アオイキト˥イキ アオ˥イキトイキ	99,98	アオイキト˥イキ 古はアオ˥イキ(・)ト˥イキ	99,98,97
有象無象 （法則97がなくなる）	ウゾーム˥ゾー ウゾ˥ー(・)ム˥ゾー	99,98,97	ウゾーム˥ゾー ウゾ˥ームゾー 古はウ˥ゾームゾー	99,98

9) 習得法則 15 は「後部が漢語二字の結合名詞」。明解(1981)と新明解(2010)によると，「前部には関係なく，後部によりアクセントが決定される。すべて規則型のみ」だという。また，「前・後部とも二拍以下の語には例外が多いが，四拍語は多く平板型になる」と記載されている。つまり，法則 15 は前・後部とも二拍以下の語以外のものは 1 単位の中高型アクセントになるという筆者の言う「融合アクセント」にほぼ相当すると思われる。「一寸法師」については，その前部の「一寸」はこの 2 版とも[イッス˥ン]と記載されていることから，[イッス˥ンボーシ]は法則 98「接合文節」に，[イッスンボ˥ーシ]は法則 99「結合文節」に似ていると考えられる。「上方贅六」については，その前部の「上方」は 2 版とも[カミガタ] [カミガタ˥]と，後部の「贅六」は 2 版とも[ゼーロク] [ゼーロク˥] [ゼーロ˥ク]と記載されていることから，[カミガタゼーロク˥]は法則 98「接合文節」に，[カミガタゼ˥ーロク]は法則 99「結合文節」に似ていると考えられる。

そんな数少ない辞書におけるアクセントの記載変化の中に，融合へ向かう記載変化に加え，非融合へ向かう記載変化も観察された。

また，NHK2016 年版と新明解において，語種と形態構造を制限しない場合，4 つの漢字で表記される語で非融合アクセントの発音を含む語の割合はそれぞれ 25%，15%と低い。複合語全体から見ると非融合アクセントは少数であると言えよう。また，そのどちらにおいても，非融合だけのもの方が融合・非融合両様のものより多いという結果になった。

参考文献

秋永一枝（編）(1981)『明解日本語アクセント辞典 第二版』三省堂.

秋永一枝（編）(2010)『新明解日本語アクセント辞典 CD 付き』三省堂.

太田聡(2016)「日本語複合語の不規則なアクセント型について予備的考察」『山口大学文学会志』66, 89-99, 山口大学文学会.

窪薗晴夫(1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版.

郡史郎(2016)「アクセントの複合形態と長い複合語のアクセント—『携帯電話電源オフ車両』などの説明原理についての覚え書き—」『音声言語 VII』31-48, 近畿音声言語研究会.

白勢彩子・張永林(2014)「アクセント辞書および自発発話音声における複合名詞のアクセント」『音声研究』18(2), 23-29, 日本音声学会.

日本放送協會（編）(1943)『日本語アクセント辭典』日本放送出版協會.

日本放送協会（編）(1951)『日本語アクセント辞典』日本放送出版協会.

日本放送協会（編）(1966)『日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会.

NHK（編）(1985)『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』日本放送出版協会.

NHK 放送文化研究所（編）(1998)『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』NHK 出版.

NHK 放送文化研究所（編）(2016)『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK 出版.